『[The Invention of Religion in Japan](http://www.amazon.co.jp/Invention-Religion-Japan-Ananda-Josephson/dp/0226412342/ref%3Dsr_1_sc_1?ie=UTF8&qid=1382500638&sr=8-1-spell&keywords=The+invention+of+reliigion+in+japan" \t "_blank)　日本風religionの発明』[裏表紙Review](reviiew%20content.pdf)の翻訳

2013.10.23　翻訳　齋藤旬

日本はその長い歴史の中で、我々西洋人が”religion”と呼ぶ概念を持ったことがなかった。従って、”religion”に対応する日本語もなかった。似たものも何もなかった。しかし1853年、米国の黒船が日本の沿岸に現れ、時の日本政府に条約締結を迫り他の何よりも「religionの自由」を要求したとき、日本はこのWestern ideaと格闘をしなければならなくなった。本書では、どの様にして日本のリーダー達が日本風religion（religion in Japan）を発明し、それを契機に西洋流のintellectual, legal, and culturalな変化をtraceしていったかを、 著者Jason Ánanda Josephsonが明らかにしている。Religionの意味をハッキリさせる課程で日本国は、圧政や覇権の物語よりも、或る貴重なチャンスを掴んだ。日本の当局者達は、Christianityのためのスペースを削りだし、仏教に或る形式を与え、神道をnational ideologyに祭り上げ、土着のshamanや巫女霊媒等の従来の祭事を迷信（superstitions）の範疇 --- 許容の範囲を超えるもの --- として追いやった。Josephsonは、日本風religionの発明はひとえに政治的になされたものだったととらえている。それは、各宗教のboundary-drawing exercise（役割分担の明確化）であり、仏教、儒教、神道の旧来からの重要性を極度に際立たせ永続効果を持たせただけでなく、我々西洋が今日のreligion概念を形成した過程を、subtle（微妙、かすか）ではあるがsignificant（大きな影響を及ぼす）方法でreshapeしたものでもあったととらえている。

「Jason Ánanda Josephsonは、日本がreligionをどう定義したかを洞察鋭く分析している。日本風に定義されたreligionを用いて、如何にして日本は、Christian missionary agendasを満たしつつ、かつ、日本古来の伝統をラジカルに再構築し、新たなイデオロギー規範を日本市民に導入しながらも、なおかつ、西洋列強に対する日本の優位性を保ったか、を分析している。彼の博覧強記により、日本のこの出来事がtransnationalなperspectiveからとらえられている。religion、迷信、世俗が相互に補完し合う日本の特徴に、分かりやすい理論的洞察が加えられている。本書は、現代日本だけでなく、宗教、近代性、国民国家間政治（religion，modernity，and the politics of nation state）の複雑な絡み合いにも関心を持つ全ての読者にとって啓蒙的な読み物となっている。」

Jacqueline Stone　Princeton University

「本書：『日本風religionの発明』は正に革命的だ。独創的。良く研究され内容が充実している。日本の、思想、religion、科学、歴史に関する基礎研究の従来からの主張をover tuneするものだ。Jason Ánanda Josephsonは、今まで一般に日本のreligionと見られてきたものに対して、新たな見方を、挑発的だが説得的に与えている。本書は、この研究分野を徹底的にreshapeするだろう。」

Sarah Thal　University of Wisconsin-Madison